

インド語インド文学

◇教員◇

准教授：梶原三恵子

助教：河崎豊

◇学生◇

学部：2名、修士課程：1名、博士課程：2名

(1) はじめに

「サンスクリット語は、その古さはどうであろうとも、驚嘆すべき構造をもっている。それはギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊かであり、そのいずれにもまして洗練されている。」

これは、しばしば言語学の創始者と呼ばれるウィリアム・ジョーンズ(1746～1794)が、後に印欧語族確立の礎となる講演で述べた言葉である。インド亜大陸では、このサンスクリット語をはじめ、3千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献は、質と量のいずれにおいても世界に冠たるものとなっている。

国際化が叫ばれるようになって久しく、たしかに国際化が進んでいる分野もあるが、反面、目先の国内事情にのみ腐心する傾向もますます強くなっている。これからのわが国を担う学生諸君には、目先のことだけにとらわれずに広い視野をもってほしい。東洋・西洋といった区分に大きな意味があるとは思えないが、かりにその区分を用いるなら、インドはちょうどそのはざまに位置する。目先の関心だけではみえてこないものが、インド文化を学ぶことによってみえてくるだろう。

学部生活は2年にすぎない。この短期間に何ができるだろうかという思いは強いであろう。ましてや、以下に述べるように、インド語インド文学専修課程(略称「印文」)では原典講読を中心とするから、かなりの時間を語学学習にとられることは避けられない。しかし、広く浅く、場当たりの多くの書物を読んだり、ましてや、ネットを通じて安易に情報を得たところで、身になるものは少ない。なによりも、このようなやり方では、大学という学問の場にいながら、学問するという経験をしないで大学を去ることになる。異文化理解にしる自文化理解にしる、一朝一夕でできるもの

ではない。むしろそれらは、辞書を繰りつつ原典に向かい、個々の単語や行間に思いをはせるという、日々の地道な努力によって可能になるのである。

(2) インド語インド文学とは

紀元前 2000 年期のインダス文明については、文字の解読を含めいまだ多くのことが明らかにはなっていないが、前 1000 年期の文学であるヴェーダはかなり正確に伝わってきている。つまり、インドを対象とする学問は、3000 年をはるかに超える時代を含むことになる。この間にはインドアーリア語系やドラヴィダ語系などの、おそらく数千におよぶ言語が生じては消えていったと思われるが、現在でも数百におよぶ言語があり、公用語だけでも 22 にもなる。また、ここで言うインドとは、今日の「インド共和国」ではなく、インド文化が栄えた地域であるから、時代によっては周辺のバングラデシュ、ブータン、ネパール、パキスタンも含む（したがって、このような場合、「南アジア」とか「インド亜大陸」と呼ぶこともある）。また、インド文学というとき、それは詩歌・説話などの狭義の文学作品だけでなく、学術論書、宗教文献なども含んでいる。このように、インド文学は、地域、時代、言語、内容ともに、非常に広範囲を対象としている。

インド文学は、質と量のいずれにおいても世界に冠たる文学であり、アジアのみならず西洋にも少なからぬ影響をあたえてきた。そこで、世界の主要大学はインド学（インド文学・哲学を中心とした関連諸学）の講座をもつ。わが国でもインド文学講座（当初の名称は「梵文学講座」）の歴史は古く、東京大学に開設されたのは明治 34（1901）年である。

インド研究にはさまざまな観点と方法がある。そのようななかで、本専修課程で目標とするのは、3 千年の歴史をもつインド文化の形成と発展にもっとも重要な役割を果たしてきた、サンスクリット語をはじめとするインドの古典語を学びながら、それらの文献に即して、インドのみならずアジア諸地域にも広く伝播してゆくインド文化を探求することである。

(3) 教員と授業の紹介

インド文学の対象とする時代も領域も広いが、本専修課程では古代（紀元前十二世紀頃）から古典期（紀元数世紀頃）にかけてのインド語インド文学の教育研究を中心とする。梶原准教授はサンスクリット語学文学を専

門とする。ここ数年の主な関心は、ヴェーダ期の家庭祭礼の研究を通じて、古代インド社会文化史を解明することである。もっとも、教員の専門研究が講義・演習にそのまま反映されるわけではなく、狭義の専門分野を越えて、インド古典のさまざまな領域の講義や演習が行われることが少なくない。この他、毎年2～3名の非常勤講師を学外からお招きし、それぞれの専門領域の講義を担当して頂いている。

必修科目としては、文学史概説・演習・特殊講義のほかに、語学概論が設けられている。なかでも語学概論は、原典を読みこなすためにもっとも必要な語学力の習得を目指しており、サンスクリット語の他に、もう一つのインド語（タミル語・ヒンディー語・パーリ語など）の学習を必修としている（これは、想像するほど大変なことではない）。演習では、例えばマハーバーラタ、マヌ法典、ウパニシャッド、ブラーフマナなど、サンスクリット語・タミル語・パーリ語・プラークリット語の原典を講読することになる。特殊講義も実際は演習形式で行われることが少なくない。

（4）進学から卒業まで

このようなわけであるから、本専修課程に進学を希望する学生は、語学学習にそれなりに時間をとられることを覚悟しておいて欲しい。その点、教養課程でサンスクリット語の初歩を学んでおいた方がよいかもしれない。また、将来、研究をつづけることも考えているなら、諸外国語（英語、ドイツ語、フランス語など）の研究書や論文を読む必要が生じるから、それらの読解力を少しずつ養ってゆくことが望ましい。しかし、だからといって狭義の語学的才能が必要なのではなく、むしろ他の多くの学習と同様に、日々の努力を怠らない堅実さが重要なのである。

このような学習態度は進学しても求められる。サンスクリット語やタミル語の文法は複雑であるが、日々の地道な努力によって、少しずつそれらの文献の読解力を身につけてゆくことができるであろう。そして、堅実にじっくりと噛みしめながら原典に取り組むうちに、おのずからそれらインド語学習と原典講読のおもしろさはもちろん、学問する楽しみをも味わうことができるようになるだろう。

本専修課程は、将来たとえば、ラビンドラナート・タークル（タゴール）のベンガーリー語詩歌やプレーム・チャンドのヒンディー語小説などの研究に携わろうとする学生にも、門戸が開かれている。しかし、このような近

代インドの語学文学を志す学生にも、まずサンスクリット語やタミル語の知識を身につけることがもとめられる。このような行き方こそ迂遠なようでいてもっとも堅実なものと考えられるからである。

卒業後は、語学学習あるいは学問に魅せられるのか、大学院へ進学する者が多い。そのためか、卒業に際して卒業論文の提出あるいは特別演習が求められるが、原典講読の基礎訓練となる特別演習をとる学生が多い。しかし、このことは卒業論文の提出を望まないということではない。

本専修課程では、学部ではインド語の学習とさまざまな原典講読をし、学生がみずからの専門を決めるのは大学院進学後ということが多く、参考までにここ数年の大学院生の主な研究内容を記しておく。

博士課程

- ・ ヴェーダ祭式学
- ・ サンスクリット叙事詩
- ・ 古代インド天文学
- ・ 古代インド医学
- ・ タミル叙事詩研究

修士課程

- ・ リグヴェーダ詩論
- ・ 古典インド演劇論

—サンスクリット文学作品から—

tasmād asaktaḥ satataṃ kāryaṃ karma samācara /
asakto hy ācāran karma param āpnoti pūruṣaḥ //

Bhagavadgītā 3.19

故に執着なく、常になすべき行作をなせ。

何となれば、執着なく行作をなす人は、

最高なるものに達す。

(辻直四郎訳)

cūtaṣṭyā samāśliṣṭo dṛṣyatām tilakadrumaḥ/
śuklavāsā iva naraḥ striyā pītāngarāgayā//
bālāsokaś ca nicito dṛṣyatām eṣa pallavaiḥ/
yo 'smākaḥ hastaśobhābhir lajjamāna iva sthitaḥ//

Buddhacarita 4.46,48

このマンゴの細枝にからみつかれたティラカの木をごらんください。
それはあたかも白衣を着た男が、
その四肢を、黄色の顔料で塗った女にからみつかれているようであります。
また、
あの若芽を盛ったアショーカの若木をごらんください。
それはあたかも私たちの手があまりに美しいので、
恥ずかしそうに赤らんでいるかに見えます。 (原実訳)

—タミル文学作品から—

tiṇaittuṇai naṅṅi ceyiṇum /
paṇaittuṇaiyāk kolvar payaṅṅeri vār //
irunōk kivaḷuṅka ṇuḷla /
torunōkku nōynōkkoṅ ṛannōy maruntu//

Tirukkuraḷ 104,1091

たとえ芥子粒^{けし}ほどの大きさの親切がなされようと、
親切の価値を知る者は椰子^{やし}の実の大きさと考える。
彼女の化粧を施した目には二つの眼差しがある。
恋の病を引き起こす眼差しと、それを癒す薬となる眼差しである。 (高橋孝信訳)